

ペレにある



2001年1月 No.増刊
北海道立天北農業試験場
〒098-5736 枝幸郡浜頓別町緑ヶ丘
TEL 01634-2-2111
FAX 01634-2-4686
<http://www.agri.pref.hokkaido.jp/tenpoku/>

「道北酪農王国」の夢実現のために

場長 今 友親

昨年、馬鈴薯の花咲く7月末頃、十勝を訪れ、坂本直行記念館に立ち寄り、彼の描いた日高の山並みを見、「開墾の記」を読み、当時の農業の営みの過酷さに震撼させられました。それから70年後の北海道農業は過酷な重労働からの開放と安定した収穫が得られるようになったことを思い、また見渡す限りの整然と生育した畑作風景を見、その発展に感無量であります。この間、高度経済成長、規模拡大、食生活の変化、行政価格の変動などの社会情勢変化の煽りを受け、北海道農業も厳しい変遷の歴史があったことを想います。

天北地域においても、幾多の変遷を経て、最も適地作である酪農にたどり着き、今は「道北酪農王国」の夢実現のために頑張っています。もはや急激な変化は期待できず、一步一步積み重ねの健全経営としての資源循環型の生きがいのある酪農経営が期待されていると確信します。食生活の変化により乳製品の需要がますます高まり、特に牛乳は国民の食生活には欠かせない状況から更なる発展が期待されていることは明らかであります。本来、食糧自給率を100%に保つことが国の基本であり、家畜ふん尿の有効化、素敵な酪農景観の維持などの重要性を思う時、将来の姿として「放牧を取り入れた土地利用型酪農」が浮かび上がってきます。こういった視点から「自給率向上」「環境保全」「地域ニーズ」を重点とした地域農業にしっかりと根差した研究ビジョンを「天北酪農フォーラム」の議論を踏まえながら、さらに皆さん方の力をお借りして作成し、それを基に「地域農業に貢献する天北農試」として新たな技術の開発・普及に邁進致すことが勤めと思っております。

また、開発した技術の速やかな普及を図るべく本年「第1回道北圏酪農新技術セミナー」を開催し、「開かれた試験場」として一層の努力をして参りたいと考えております。更なる皆さん方のご支援をお願いします。

重点研究の内容紹介

1. 自給率向上のための牧草生産・利用技術

①集約放牧技術

天北農試は平成12年4月の機構改正により研究部と技術普及部の2部体制に改組されました。技術普及部は専門技術員を中心に研究員とからなる新しい組織です。試験研究と技術普及のパイプ役として、また地域密着型の試験研究強化のため研究部とともに技術体系化チームを組織して開発技術の体系化などに取り組みます。その第一段が本研究です。

道北地域は多雪地帯であるため放牧に向くペレニアルライグラスの適地です。現在、管内で放牧飼養の酪農家は80%ありますが、放牧草からの乳生産の効果は十分ではありません。技術体系化チームは放牧への依存度を高めるため集約放牧に係る個別技術を体系化する課題に取り組んでいます。



②ペレニアルライグラスの用途別品種育成

当場は当地域向けのペレニアルライグラス品種育成を目指しています。平成11年には主として放牧に利用する「ポコロ」（アイヌ語で誕生を意味する）を育成し、現在、第二段階として採草と放牧の兼用利用で能力を発揮する中生品種などを育成中です。

③低コスト・良質・安定多収生産技術

集約放牧に係る個別技術としてペレニアルライグラス放牧草の飼料成分表作成試験（平成14年まで）が実施されています。また、同草種の放牧は国内でも試験事例や農家での導入・利用が増えてきていますが、採草利用については残された課題があります。その優れた栄養価・採食性から貯蔵飼料として活用が期待されますので採草利用法試験（平成13年まで）を実施中です。

アルファルファは採食性、栄養価に優れており採草地用のマメ科牧草として重要です。しかし、近年栽培面積が伸び悩んでおり、更新時の個体定着の促進のため栽培技術改善試験について取り組んでいます（平成14年まで）。

2. 環境保全型草地管理技術の確立

豊富な土地資源に恵まれている道北地帯と言えども、酪農の生産基盤の崩壊にもつながりかねない大量に産出されるふん尿問題が深刻化することが懸念されています。これを未然に防止するには、ふん尿の適切な処理とともに、ふん尿を草地へ適切に施用して牧草に最大限利用させることが最も重要です。このような背景から、土－草－牛という生産要素を巡る物質循環のバランスを踏まえた上で、草地の環境容量をベースとした新たな視点から肥料養分の草地系外への流出を防止する刈取りや放牧技術さらに施肥法などの、いわゆる環境保全型草地管理技術の確立が急務です。そのため、天北農試では草地から系外への流出水中の硝酸態窒素濃度を10ppm以下とするような養分管理を重視し、具体的な技術開発に取り組んでいます。

①堆肥等有機物・化学肥料適正使用指針策定調査

環境容量を視野にいれながら草地更新時の堆肥施用限界量を、環境面を重視して評価します。

②家畜ふん尿による環境汚染防止対策技術の体系化試験

ヨーロッパなどで汚染源として問題視されている放牧地を対象に、まずその周辺水圏の硝酸態窒素の流出実態を明らかにします。さらにそのような実態があれば硝酸態窒素流出を軽減するため、水飲み場の配置や緩衝帯および適正な放牧圧等の対策を検討する予定です。

③家畜ふん尿主体の施肥設計システムによる高度利用技術の開発

施肥標準・土壌診断技術と連動したふん尿主体の施肥設計システムを開発します。同時に、ふん尿の適正な施用時期も採草地と放牧地について明らかにします。

H11年に「家畜排せつ物の管理の適正化及び利用に関する法律」や「水質汚濁に係わる環境基準の一部改正」などの法律が施行されてから2年が過ぎ、そろそろ具体的成果が話題となる時期になってきました。期待に応えられるような技術を開発するため、全場一丸となって日夜努力していきたいと思えます。

「道北圏酪農新技術セミナー」開催のお知らせ（終了）